

1列王記3-5章「ソロモンの知恵と平和」

1A 民を治める判断 3

1B ソロモンの願い 1-15

2B 二人の遊女 16-28

2A 王の統治 4

1B 行政 1-19

2B 平和と知恵 20-34

3A 異邦人との平和 5

1B 平和の契約 1-12

2B 役務者の徴用 13-18

アウトライン

列王記第一3章を開いてください。私たちは、ダビデの死後、その息子ソロモンがイスラエルを治める姿をここから読み始めることとなります。彼の統治は3章から11章まで続きますが、そこには残念な歴史が記されています。主を愛していたソロモンですが、主に最後まで従い通さなかったのです。覚えていますか、主に従い通した人々として、カレブそしてヨシュアがいましたね。エジプトから出てきて約束の地に入ろうとした時に、他の十人のスパイはそこに巨大な住民がいると言って民を脅かしましたが、カレブとヨシュアだけでは主が共におられるのだから倒すことができる、と励ましました。

けれども、ソロモンはそれができませんでした。なぜか？彼の生涯を通して、私たちが考えなければいけない、キリスト者の歩みを全うさせないつまずきの石を学んでみたいと思います。

1A 民を治める判断 3

1B ソロモンの願い 1-15

3:1 ソロモンはエジプトの王パロと互いに縁を結び、パロの娘をめぐって、彼女をダビデの町に連れて来、自分の家と主の宮、および、エルサレムの回りの城壁を建て終わるまで、そこにおらせた。

ソロモンの治世は、パロの娘をめぐることが大きな出来事となって始まりました。ダビデは、諸国の民と必要ならば戦うことによって平和を得ましたが、ソロモンは外交によって平和を得ました。イスラエルにとって、南の大国エジプトと平和を結ぶことは死活的な課題です。当時は、政略結婚は一般的に行なわれていました。縁戚同士になることによって、互いに戦うことを回避したのです。そして、列王記の著者は注意深く、ソロモンがパロの娘の世話をしていたことを書き記しています。神殿の横にソロモンの家を建てるときに、彼女のためにも家を建てたことを記しています(7:8)。そ

して、建てたパロの娘をめとった代わりに、パロはソロモンにゲゼルという町を与えています(9:17)。彼がエジプトとの関係に細心の注意を払っていたことが伺えます。

けれども、パロの娘との結婚というのは、なんとも不気味な響きを持っています。エジプトは、アブラハムが飢饉の時に下っていったところであり、それによって女奴隷ハガルを得たところです。イサクにも下るなど命じ、そしてヤコブも立ち止まって下って良いのかどうか、主に伺ったほどです。モーセの律法によって、決してイスラエルをエジプトに下らせてはならない、と何度となく神は命じておられました。バビロン捕囚後、残された民も主の命令に背いて下ったところがエジプトであることを、エレミヤ記は記しています。

神は、パロの娘との結婚について咎めることはありませんでしたが、後に多くの外国の女を愛したとことを怒られました。彼の生涯の終わりは、次の言葉から始まります。「ソロモン王は、パロの娘のほかに多くの外国の女、すなわちモアブ人の女、アモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヘテ人の女を愛した。(11:1)」そして妻が三百人、そばめが七百人いたことが記されています。このために、王国が分裂してしまいました。

モーセはこのことを既に預言しており、こう言いました。「多くの妻を持つてはならない。心をそらせてはならない。(申命 17:17)」そして、バビロン捕囚後、帰還した民に対して、総督ネヘミヤが彼らの異邦人との結婚を強く咎めた言葉がネヘミヤ記にあります。「イスラエルの王ソロモンは、このことによって罪を犯したではないか。多くの国々のうちで彼のような王はいなかった。彼は神に愛され、神は彼をイスラエル全土を治める王としたのに、外国の女たちが彼に罪を犯させてしまった。(11:26)」ですから、ソロモンがパロの娘と結婚したことは、主への愛から反れてしまわせる第一歩となりました。

3:2 当時はまだ、主の名のための宮が建てられていなかったのので、民はただ、高きところでいけにえをささげていた。3:3 ソロモンは主を愛し、父ダビデのおきてに歩んでいたが、ただし、彼は高き所でいけにえをささげ、香をたいていた。

ここに、ソロモンの霊的生活が端的に描かれています。「主を愛して、父ダビデのおきてに歩んだが、高き所でいけにえを捧げた」ということです。高き所とは、まことの神、あるいは神々に対しても祭壇を築いて、いけにえを捧げるところです。アブラハムがイサクをモリヤ山で捧げようとしたのも、ある意味、高い所における捧げ物でした。そして、預言者サムエルも、いけにえを高き所で捧げていました。

けれども、モーセの律法の中には、主が選ばれた一つの場所でいけにえを捧げなさいという命令があります(申命 12:5-7)。それは、周囲の民が高き所でいけにえを捧げており、彼らの異教の慣わしに自分たちが影響を受けてしまうからです(レビ 17:1-7)。それで、カナン人の高き所は、徹

底的に破壊しなさいと命じておられました(申命 12:2-4)。けれども、まだ神殿が建てられていなかったので、高き所でいけにえを捧げても、それ自体が罪とはされませんでした。ソロモンはもちろん、その時は高き所で偶像を拝んでいません。けれども晩年に、先の多くの外国の女たちと結婚した後、高き所でそれらの外国の神々にいけにえを捧げたことが記されています。

そして、列王記また歴代誌に、「高き所」が数多く出てきて、そこで何をしたか、それぞれの王の神との関係が如実に表れていました。たとえダビデにならって主に従った王であっても、高き所を取り除かなかった、という記述もあります。高き所を取り除いたのは、ただ、ヒゼキヤとヨシヤだけでした。

3:4 王はいけにえをささげるためにギブオンへ行った。そこは最も重要な高き所であったからである。ソロモンはその祭壇の上に一千頭の全焼のいけにえをささげた。

とてつもない数のいけにえを捧げています。歴代誌には、ソロモンの他に全イスラエルまた、ソロモンの下で働く指導者らが彼といっしょに行ったことが記されています(2歴代 1:2-3)。そして、そこにモーセの立てた会見の天幕があった、とあります。ダビデはキルヤテ・エアリムにあった契約の箱をエルサレムの自分の町に運んだけれども、その他のものは、サウルの時代はノブにあり、ソロモンの時代にはここギブオンにありました。

3:5 その夜、ギブオンで主は夢のうちにソロモンに現われた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。」

主がソロモンに言われていることは、非常に広いものです。何でも良いから与えよう、願っているものを言いなさい、と聞かれているからです。同じように私たちが主から尋ねられたら、どう願うでしょうか？ 事実、主は弟子たちに、「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。(ヨハネ 14:13)」と言われました。どう願いますか？ ソロモンの願いを読んでみましょう。

3:6 ソロモンは言った。「あなたは、あなたのしもべ、私の父ダビデに大いなる恵みを施されました。それは、彼が誠実と正義と真心とをもって、あなたの御前を歩んだからです。あなたは、この大いなる恵みを彼のために取っておき、きょう、その王座に着く子を彼にお与えになりました。3:7 わが神、主よ。今、あなたは私の父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし、私は小さい子どもで、出入りするすべを知りません。3:8 そのうえ、しもべは、あなたの選んだあなたの民の中におります。しかも、彼らはあまりにも多くて、数えることも調べることもできないほど、おびただしい民です。3:9 善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」3:10 この願い事は主の御心になかった。ソロモンがこのことを願ったからである。

ソロモンは、自分が神の約束によって定められた王の任務をきちんと遂行することができるように、知恵を求めました。主はこの願いをたいへん喜ばれ、彼が願っている以上のものをお与えになります。なぜソロモンはこのような祈りをささげることができたのでしょうか？それは、彼が主を礼拝していたからです。いけにえを捧げ、また主に尋ねられたときに、彼はまずダビデに示された神の大いなる恵みを神に申し上げました。願いを立てるのではなく、主に礼拝していました。

このように礼拝をすれば、自分の思いが主のそれと似てくるようになります。自分の欲を満たすのではなく、主のみこころを行なうことを願いとするようになってきます。そのため、何でも願って良いといわれたとき、御心にかなう願いをすることができたのです。そこでヨハネの手紙第一の中にこのような約束があります。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。(5:14)」

3:11 神は彼に仰せられた。「あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、3:12 今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたのあとに、あなたのような者も起こらない。3:13 そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。3:14 また、あなたの父ダビデが歩んだように、あなたもわたしのおきてと命令を守って、わたしの道を歩むなら、あなたの日を長くしよう。」

主は、ソロモンが願う知恵に加えて、富と誉れも付け加えてくださいます。これは、聖書の原則、「神の国とその義を第一に求めるなら、これらのものは加えて与えられる」であります。主を第一とする者だからこそ、これらの富と名声を主の栄光のために用いることができます。

またダビデが歩んだように、神のおきてを守り行なうなら、あなたの齢を長くしようという条件付約束もあります。今後、ソロモンの後の王たちも、ダビデのように歩んだかどうか、ダビデの歩みが基準となっていきます。それだけ、私たちのダビデの生涯の学びは非常に重要でした。そこに、主の命令を守り行なっていく模範がありました。

3:15 ソロモンが目をさますと、なんと、それは夢であった。そこで、彼はエルサレムに行き、主の契約の箱の前に立って、全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえをささげ、すべての家来たちを招いて祝宴を開いた。

興味深いですね、夢から覚めると、この神の約束に感動して、今度はエルサレムにある契約の箱の前でいけにえを捧げました。そして家来たちと祝宴を開いています。

2B 二人の遊女 16-28

そして次に、ソロモンに神が知恵をお授けになった、一つの事例が記されています。

3:16 そのころ、ふたりの遊女が王のところに来て、その前に立った。3:17 ひとりの女が言った。「わが君。私とこの女とは同じ家に住んでおります。私はこの女といっしょに家にいるとき子どもを産みました。3:18 ところが、私が子どもを産んで三日たつと、この女も子どもを産みました。家には私たちのほか、だれもいっしょにいた者はなく、家にはただ私たちふたりだけでした。3:19 ところが、夜の間に、この女の産んだ子が死にました。この女が自分の子の上に伏したからです。3:20 この女は夜中に起きて、はしためが眠っている間に、私のそばから私の子を取って、自分のふところに抱いて寝かせ、自分の死んだ子を私のふところに寝かせたのです。3:21 朝、私が子どもに乳を飲ませようとして起きてみると、どうでしょう、子どもは死んでいるではありませんか。朝、その子をよく見てみると、まあ、その子は私が産んだ子ではないのです。3:22 すると、もうひとりの女が言った。「いいえ、生きてるのが私の子で、死んでいるのはあなたの子です。」先の女は言った。「いいえ、死んだのがあなたの子で、生きてるのが私の子です。」こうして、女たちは王の前で言い合った。

興味深い事例です。ソロモンという何百万もの民を抱えている王に、二人の遊女が訴えに来ています。私たちがダビデのことを学んでいたときに、訴える者たちがエルサレムに来ていた場面を読みましたね。各地にある裁判所で訴えが取り扱ってもらえなければ、このように王に直訴する制度がありました。

けれども、遊女というと卑しい女とみなされています。けれども、このような小さな事件に対しても、ソロモンが正しい判断を下す、というところに神の御心があります。今朝交読文で読みました、詩篇 72 篇は、ソロモンによる詩篇でした。「神よ。あなたの公正を王に、あなたの義を王の子に授けてください。彼があなたの民を義をもって、あなたの、悩む者たちを公正をもってさばきますように。山々、丘々は義によって、民に平和をもたらしますように。彼が民の悩む者たちを弁護し、貧しい者の子らを救い、しいたげる子どもを、打ち砕きますように。(詩篇 72:1-4)」このように、悩む者、貧しい者を救うことが公正な裁きとなり、その裁きのゆえに平和が訪れます。

3:23 そこで王は言った。「ひとりには『生きてるのが私の子で、死んでいるのはあなたの子だ。』と言い、また、もうひとりには『いや、死んだのがあなたの子で、生きてるのが私の子だ。』と言う。」3:24 そして、王は、「剣をここに持って来なさい。」と命じた。剣が王の前に持って来られると、3:25 王は言った。「生きている子どもを二つに断ち切り、半分をこちらに、半分をそちらに与えなさい。」3:26 すると、生きている子の母親は、自分の子を哀れに思っ胸が熱くなり、王に申し立てて言った。「わが君。どうか、その生きている子をあの女にあげてください。決してその子を殺さないでください。」しかし、もうひとりの女は、「それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください。」と言った。3:27 そこで王は宣告を下して言った。「生きている子どもを初めの女

に与えなさい。決してその子を殺してはならない。彼女がその子の母親なのだ。」3:28 イスラエル人はみな、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである。

ソロモンが行なつたのは、母性本能に訴えることでした。母は、自分の手から子どもがいなくなることよりも、子どもの命をもちろん大事にするでしょう。この本能を利用してソロモンは赤ん坊を二つに切る、と言つたのです。こうした非常に知恵ある、表面にはでなかつた公正な判断をソロモンは下しました。それは神の知恵があつたからだ、と書かれています。

この知恵があつてこそその平和でした。次の章からソロモンの平和の統治の姿を読みますが、知恵というものは平和をもたらします。「しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。(ヤコブ 3:17-18)」

2A 王の統治 4

そして次から王の統治の姿が書かれています。

1B 行政 1-19

4:1 こうして、ソロモン王は全イスラエルの王となった。4:2 彼の高官たちは次のとおり。ツアドクの子アザルヤは祭司。4:3 シシャの子らエリホレフとアヒヤは書記。アヒルデの子ヨシャパテは参議。4:4 エホヤダの子ベナヤは軍団長。ツアドクとエブヤタルは祭司。4:5 ナタンの子アザルヤは政務長官。ナタンの子ザブデは祭司で、王の友。4:6 アヒシャルは宮内長官。アブダの子アドニラムは役務長官。

ソロモンが「全イスラエルの王となった」という言葉には、北のイスラエルと南のユダのどちらもが、という意味合いがあります。ダビデの時から、ユダとイスラエルには対立が見え隠れしました。けれどもソロモンの治世ではそれが一つにまとめられました。

その理由の一つが、優れた人材起用です。すぐれた指導者は、責任分担にも優れています。まず、祭司の名です。神殿における礼拝が、ソロモンにとっては最も重要でした。アザルヤはツアドクの子であるとありますが、孫です。昔はこのように、子孫であれば「子」と呼ばれます。この他にツアドク自身とエブヤタルの名も出てきますが、これはおそらく名譽的な称号でしょう。ツアドクは老齢ですし、エブヤタルは罷免させられていましたから。そして、エリホレフとアヒヤが務める書記は、行政、貿易、軍隊などあらゆる国政に関わる記録を担当する者たちでした。そしてヨシャパテは、ダビデ王のときにも参議として活躍していました。王の日課を記録する役目です。前にソロモンが命じた死刑を実行したベナヤは軍団長です。政務長官とは、次に出てくる守護たちを統括する役目です。宮内長官はもちろん、ソロモンの宮殿の事柄を司ります。そして、役務長官と出てきます

が、これは国の事業のために人々を借り出させて労役を課すところの執行者です。

(BKC [OT] p. 496)



4:7 ソロモンは、イスラエルの全土に十二人の守護を置いた。彼らは王とその一族に食糧を納めていた。すなわち、一年に一月間、おのおの食糧を納めていた。4:8 彼らの名は次のとおり。エフライムの山地にはフルの子。4:9 マカツ、シャルビム、ベテ・シメシュ、エロン・ベテ・ハナンにはデケルの子。4:10 アルボテにはヘセデの子。・・彼にはソコとヘフェルの全地が任せられていた。・・4:11 ドルの全高地にはアビナダブの子。・・ソロモンの娘タファテが彼の妻であった。・・4:12 タナク、メギド、それに、イズレエルの下ツアレタンのそばのベテ・シェアンの全土、ベテ・シェアンからアベル・メホラ、ヨクモアムの向こうまでの地には、アヒルデの子バアナ。4:13 ラモテ・ギルアデにはゲベルの子。・・彼にはギルアデのマナセの子ヤイルの村々と、バシヤンにあるアルゴブの地域で、城壁と青銅のかんぬきを備えた六十の大きな町々が任せられた。・・4:14 マハナイムにはイドの子アヒナダブ。4:15 ナフタリにはアヒマアツ。・・彼もまた、ソロモンの娘バセマテをめぐっていた。・・4:16 アシェルとベアロテにはフシャイの子バアナ。4:17 イッサカルにはパルアハの子ヨシャパテ。4:18 ベニヤミンにはエラの子シムイ。4:19 エモリ人の王シホンと、バシヤンの王オグの領地であったギルアデの地にはウリの子ゲベル。その地にはもうひとりの守備隊長がいた。

ソロモンは国に対する糧食を確保するために、イスラエル全土に十二人の守護を置きました。それぞれが一月分の食糧を納めます。この制度によって、ソロモンの宮殿にいる者たちのために膨大な量の食糧を提供することになります。今でも、イスラエルにある遺跡の中で、ソロモン時代の町のものがありますが、例えば、12 節の「メギド」にはソロモン王国の遺跡がありましたね。

そして、これらの守護が置かれていたのは、イスラエルの部族と重なるのですが、相続地の境とはずれています。ここで銘記しなければいけないのは、ユダ族がここにはないことです。つまり、ユダは徴税が免除されていたことになります。これが後に、北のイスラエルに対する負担感を強めて、不満を抱かせるようになります。

2B 平和と知恵 20-34

4:20 ユダとイスラエルの人口は、海辺の砂のように多くなり、彼らは飲み食いして楽しんでいた。

神がダビデによって、その子ソロモンを愛しておられることが、その国の繁栄と平和にとって知ることができます。ユダとイスラエルの人口が海辺の砂のようになる、というのは、アブラハムに対する神の約束が実現していることを表しています。「わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。(創世 22:17)」そして、そのように多くなった民が飲み食いして楽しむことができるのも、モーセを通して主が約束してくださったことです。「主が、あなたに与えるとあなたの先祖たちに誓われたその地で、主は、あなたの身から生まれる者や家畜の産むものや地の産物を、豊かに恵んでくださる。(申命 28:11)」

4:21 ソロモンは、大河からペリシテ人の地、さらには、エジプトの国境に至るすべての王国を支

配した。これらの王国は、ソロモンの一生涯の間みつぎものを持って来て、彼に仕えた。

ダビデの時代から、周囲の国々はみつぎものを持ってきていましたが、ソロモン時代には、その国境がさらに広がっています。「大河」はユーフラテス川のことです。そしてイスラエルを悩ませていたペリシテ人も今は、みつぎものを納め、さらにエジプトの国境にまで至っています。この勢力圏は、再びアブラハムへの約束を思い出させます。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。(創世 15:18)」けれども、アブラハムへの約束はそれらの土地の所有ですから、ソロモンはただ勢力圏を伸ばしていただけなので、この約束が完成したわけではありません。けれども、主がその約束に近づけてくださったことは確かです。。

4:22 ソロモン一日分の食糧は、小麦粉三十コル、大麦粉六十コル。4:23 それに、肥えた牛十頭、放牧の牛二十頭、羊百頭。そのほか、雄鹿、かもしか、のろじかと、肥えた鳥であった。

小麦粉は 6900 リットル、大麦粉はその二倍の 13800 リットルです。そしてこれらの家畜や鳥獣ですが、とんでもない量を一日のうちに消費していました。もちろんソロモン一人だけで消化したのではなく、王のところで働く者たちのためにも使われていました。

4:24 これはソロモンが、大河の西側、ティフサフからガザまでの全土、すなわち、大河の西側のすべての王たちを支配し、周辺のすべての地方に平和があったからである。

午前礼拝で話しましたように、農産物や牧畜にこれだけの産出ができたのは、周辺の国々と戦うことをしなかったからです。軍事予算を農牧に回すことができました。

そしてイスラエルは、このような形で周囲の国々のかしらとなることができました。これはモーセが神の祝福として宣言したことの実現です。「主は、賛美と名声と栄光とを与えて、あなたを主が造られたすべての国々の上に高くあげる。(申命 26:19)」

4:25 ユダとイスラエルは、ソロモンの治世中、ダンからベエル・シェバまで、みな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下で安心して住むことができた。

「ダンからベエル・シェバ」というのは、全イスラエルを表しています。そしてぶどうの木の下、いちじくの木の下というのは、平和を表していることは午前礼拝でお話ししました。例えばミカ書にこうあります。「彼らはみな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下にすわり、彼らを脅かす者はいない。まことに、万軍の主の御口が告げられる。(4:4)」周辺の国々をソロモンが支配していたので、イスラエル国内の民は敵からの脅かしもなく安心して暮らすことができました。

4:26 ソロモンは戦車用の馬のための馬屋四万、騎兵一万二千を持っていた。4:27 守護たちは、

それぞれ自分の当番月にソロモン王、およびソロモン王の食事の席に連なるすべての者たちのために、食糧を納め、不足させなかった。4:28 彼らはまた、引き馬や早馬のために、それぞれ割り当てに従って、馬のいる所に大麦とわらを持って来た。

先のパロの娘と同じように、ここにもソロモンの心が主から離れる萌芽を見ます。安全保障として、戦車と馬を持つことは平和維持のために必要なことでした。しかし列王記の著者は注意深く、戦車と騎兵が数多く集められたことを10章26節で記しています。そして、それがエジプトからの輸入であることも書かれています。そして11章に入って、外国人の女のゆえに主から心が離れた話が続くのです。モーセはイスラエルに王を立てることについて、多くの妻を持ってはならないと言っただけでなく、馬についても警告していました。「王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。「二度とこの道を帰ってはならない。」と主はあなたがたに言われた。(申命 17:16)」カナン人の王たちと戦ったヨシュア、またダビデも、異邦人の王たちの戦車の馬を、その筋を切って数を少なくしました(ヨシュア 11:6-9、2サムエル 8:4)。神の民は、こうした物理的な武力に頼らないという証しが必要でした。しかし、ソロモンは馬を増強させていくこととなります。

4:29 神は、ソロモンに非常に豊かな知恵と英知と、海辺の砂浜のように広い心とを与えられた。

非常に豊かな知恵と英知が、海辺の砂浜のように広い心につながるようです。この前のイスラエル旅行で、日本人のガイドの方はその豊富な知識を各所の説明のために私たちに分かち合ってくださいましたが、ちょうど「広い心」というのが当てはまると思います。その知識と知恵によって、自分がどこに立っているのかを安心して見ることができるのです。それがソロモンにおいては、海辺の砂浜のような広い心であったわけです。

4:30 それでソロモンの知恵は、東のすべての人々の知恵と、エジプト人のすべての知恵とにまさっていた。4:31 彼は、すべての人、すなわち、エズラフ人エタンや、ヘマンや、カルコルや、マホルの子ダルダよりも知恵があった。それで、彼の名声は周辺のすべての国々に広がった。

当時、知恵に優れていた所として、エジプトの知恵がありました。そして東の人々の知恵とありませんが、ヨブ記に出てくる人物は東からの人たちです(2:11)。東からの博士、賢者もクリスマスの時に聞きますね。そして、エタンという名は詩篇 89 篇の題名に出きます。エタンもヘマンも、歌うたいたちでした(1歴代 15:19)。

4:32 彼は三千の箴言を語り、彼の歌は一千五首もあった。

聖書の中に収められている箴言には、952 の格言があるそうです。ですから、ソロモンが語った箴言の三分の一ぐらいが聖書に収められた、ということになります。彼の歌は聖書には「雅歌」が

あります。けれども詩篇には、ほとんどありません。ここに父ダビデとソロモンの違いがあるかもしれません。彼は、神との親密な関係においてそれを言葉で言い表すことは少なかった、ということです。主についての事柄、その知恵は多く知っていました。けれども、ダビデが主に対して抱いていたような、あの心と心のつながりをソロモンの書いた文章に見いだすことができません。

ここに、少しい代目のクリスチャンと二代目のクリスチャンの間にも起こるような、微妙な差があります。父ダビデのゆえに、主はソロモンを愛しておられました。けれども、ソロモン自身がその豊かさの中で、自分自身と主との親しみが、ダビデのようではなかったのではないか？と思います。聖書の中に、一代目、二代目、そして三代目の世代に起こる出来事が記されています。モーセが一代目で、二代目がヨシュアでしたが、三代目の士師の時代には、イスラエルの民は偶像に仕えてしまいました。ある牧師がこう言いました。「この問題に対する解決は、自分自身が一代目になることだ」と。つまり、自分自身が主の御霊に満たされて、主からの語りかけを受けて、信仰をもって踏み出す開拓者にならなければいけない、ということです。

4:33 彼はレバノンの杉の木から、石垣に生えるヒソプに至るまでの草木について語り、獣や鳥やはうものや魚についても語った。

彼は植物学者、動物学者でもあったようです。

4:34 ソロモンの知恵を聞くために、すべての国の人々や、彼の知恵のうわさを聞いた国のすべての王たちがやって来た。

後に、シェバから女王が来て、ソロモンの知恵を聞きに来る話が出てきます。そしてこれは、後の御国を予表しています。キリストが再臨されたら、イザヤ書 2 章の預言にあるように、すべての国民がエルサレムにおられる主の教えを聞くために集まります。そして国々は戦うことをやめます。その知識と裁きがすぐれているからです。

3A 異邦人との平和 5

そして次の章は、異邦人の国との平和の一例を読むことができます。ツロの王との平和条約です。また、この章から 8 章までに、ソロモンの最優先の事業である神殿建設の詳細が記述されています。

1B 平和の契約 1-12

5:1 さて、ツロの王ヒラムは、ソロモンが油をそそがれ、彼の父に代わって王となったことを聞いて、自分の家来たちをソロモンのところへ遣わした。ヒラムはダビデといつも友情を保っていたからである。

ダビデの生涯を学んでいたとき、彼は決してやみくもに周囲の諸国と戦ったわけではないことを

知りました。むしろ平和をもって相手に接しました。その一人がヒラムです。「ツロ」は、地中海のおける大きな貿易都市として栄えます。エゼキエル書の預言の中に、その巨大な富によってその国が倒れる預言があります。そしてツロに有名なのは、レバノンの杉です。この杉を使って、ダビデは王宮を建てました(2サムエル 5:11)。

5:2 そこで、ソロモンはヒラムのもとに人をやって言わせた。5:3 「あなたのご存じのように、私の父ダビデは、彼の回りからいつも戦いをいどまれていたため、主が彼らを私の足の裏の下に置かれるまで、彼の神、主の名のために宮を建てることができませんでした。

「私の足の裏の下」という表現は、相手を屈服させる、従属させることを比喻しています。ダビデの時代は、まだ敵がいたために、その戦いの手によって主の名のための神殿を建てることはできない、と主はダビデに言われました。けれども、ソロモンにその事業を託しました。彼のために、多くの資材を用意しました。

5:4 ところが、今、私の神、主は、周囲の者から守って、私に安息を与えてくださり、敵対する者もなく、わざわざを起こす者もありません。5:5 今、私は、私の神、主の名のために宮を建てようと思っています。主が私の父ダビデに『わたしが、あなたの代わりに、あなたの王座に着かせるあなたの子、彼がわたしの名のために宮を建てる。』と言われたとおりです。

かつて主がナタンを通してダビデに約束されたことを、ソロモンは自分自身に当てはめています。安息が与えられたら、あなたの子が宮を建てることと約束してくださいました。

5:6 どうか、私のために、レバノンから杉の木を切り出すように命じてください。私のしもべたちも、あなたのしもべたちといっしょに働きます。私はあなたのしもべたちに、あなたが言われるとおりの賃金を払います。ご存じのように、私たちの中にはシドン人のように木を切ることに熟練した者がいないのです。」

レバノンの杉の木の調達のみならず、ツロやシドン人の労働者にも賃金を支払うと約束しました。

5:7 ヒラムはソロモンの申し出を聞いて、非常に喜んで言った。「きょう、主はほむべきかな。このおびたしい民を治める知恵ある子をダビデに授けられたとは。」

ヒラムは異邦人です。けれども、ダビデによってヤハウエなる神を知らされていました。彼自身が主を個人的な神として受け入れているかどうかは分かりませんが、十分に主のことを知っています。ひとえにダビデの影響です。

5:8 そして、ヒラムはソロモンのもとに人をやって言わせた。「あなたの申し送られたことを聞きました。私は、杉の木材ともみの木材なら、何なりとあなたのお望みどおりにいたしましょう。5:9 私のしもべたちはそれをレバノンから海へ下らせます。私はそれをいかだに組んで、海路、あなたが指定される場所まで送り、そこで、それを解かせましょう。あなたはそれを受け取ってください。それから、あなたは、私の一族に食物を与え、私の願いをかなえてください。」5:10 こうしてヒラムは、ソロモンに杉の木材ともみの木材とを彼の望むだけ与えた。5:11 そこで、ソロモンはヒラムに、その一族の食糧として、小麦二万コルを与え、また、上質のオリーブ油二十コルを与えた。ソロモンはこれだけの物を毎年ヒラムに与えた。

歴代誌によりますと、いかだを運び入れる港はヤフォです。新約聖書のヨツパです。そしてヒラムは、自分たちの一族に食糧を与えて欲しいという約束を取り付けて、それでこの契約は結ばれることとなります。

5:12 主は約束どおり、ソロモンに知恵を賜ったので、ヒラムとソロモンとの間には平和が保たれ、ふたりは契約を結んだ。

すばらしいですね、知恵を主が授けてくださったので、それで平和がヒラムとソロモンに保たれていました。

2B 役務者の徴用 13-18

5:13 ソロモン王は全イスラエルから役務者を徴用した。役務者は三万人であった。5:14 ソロモンは彼らを一か月交替で、一万人ずつレバノンに送った。すなわち、一か月はレバノンに、二か月は家にいるようにした。役務長官はアドニラムであった。

こんな多い役務者を彼は雇いました。そして彼は知恵を使って、故郷からずっと離れることのないように、また休息を与えるために、一ヶ月はレバノン、二ヶ月は家にいるようにさせました。

5:15 ソロモンには荷役人夫が七万人、山で石を切り出す者が八万人あった。5:16 そのほか、ソロモンには工事の監督をする者の長が三千三百人あって、工事に携わる者を指揮していた。5:17 王は、切り石を神殿の礎に据えるために、大きな石、高価な石を切り出すように命じた。5:18 ソロモンの建築師と、ヒラムの建築師と、ゲバル人たちは石を切り、宮を建てるために木材と石材とを準備した。

神殿には杉の他にももちろん石切りが必要でした。イスラエルの家は石でできています。木を使うことのほうがもっと貴重です。石切り場の跡が、エルサレムの旧市街、北側にあります。「ソロモンの石切り場」と呼ばれています。かなり広範囲の穴が旧市街の下に広がっています。

そして素晴らしいのは、イスラエル人の建築師とレバノン人の建築師が共同で働いていることです。ここがイスラエル人だけの礼拝の場になるのではなく、異邦人のための礼拝の場になることも象徴しているかのようです。「わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。(イザヤ 56:7)」

最後に、私たちの間に平和があるでしょうか？先に読んだヤコブ書には、地上からの知恵と上からの知恵の二つが書かれていました。「そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。(ヤコブ 3:13-18)」上からの知恵を求めてきましょう。